

名城大学 経済・経営学会会報

No.33

『名城論叢』
第九巻 第一号 付録
二〇〇八年六月三〇日
名城大学 経済・経営学会 発行

翻訳作業の舞台裏から

『中国 都市への変貌——悠久の歴史から読み解く
持続可能な未来』

ジョン・フリードマン著／谷村光浩訳 鹿島出版
会二〇〇八年二月

経済学部 谷村光浩

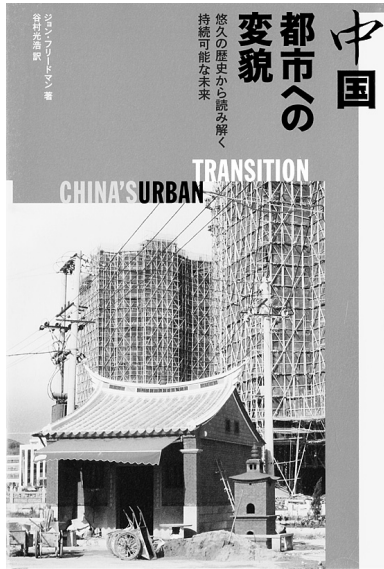
中国は、世界の大文明のひとつであり、
「タブラ・ラサ（何も書かれていない石板）ではない」。

この国の経済発展は、歴史にはほとんど関連性がないグローバリズムよりも、内からの社会的な力学によって推し進められており、その持続可能な都市開発は、中国みずからの歴史、価値観、制度との関係から論考されねばならない。

都市・地域開発論の巨匠、
ジョン・フリードマンが語る、中国都市物語。

（同書カバーの表側袖より）

この本は、Friedmann, John. 2005. *China's Urban Transi-*



tion. Minneapolis: University of Minnesota Press. の全訳であり、出版後には、建築史家の橋爪紳也氏より「急激な都市化のなか、進むべき道は」と題した書評をたまわった（朝日新聞読書欄二〇〇八年三月一六日付）。その最後の段落には、「そもそもかつての中国の人々は極端に走るのではなく、然るべき均衡を見いだすことに長じていた。現世代も、その良き伝統を継承する意志をもつべきだと主張する。碩学のこの信頼に、中国

がいかに応えるのか。……」と綴られている。カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）留学時の恩師の論述を、日本語を実用的な言語とされる国内外の方々へ、ただひたすらに言うことなく伝えたいとの一心から長らく作業を進めてきたが、本書がこのように取り上げられたこと、訳者としてもまさに望外の幸せであり、誠に有難く拝読させていただいた。

翻訳のプロセスにおいては、的確な訳語を求めて、国際機関・大学などの図書館に加え、サイバー空間に公開されている英語・中国語、日本語の関連史料・資料を、可能な限り精緻にあつた。また、どうしても確信が得られない中国都市部の旧地名表記については、異なる出版時期の地図上に記された同地点の呼称を旧知の友人にも伝え、助言・情報収集を願った。ひとえに、みずからの浅学ゆえの「悪戦苦闘」であったが、本稿では、そうした作業を通じて見いだした「ジグソーパズルのピース」にふれてみたい。

一九世紀温州東部の「three gentlemen」?

中国の農業社会から都市社会への変化において、数多くの論考が外資の役割を強調するなか、ジョン・フリードマン教授は、「第三章 農村の都市化」にて、都市化の推進力となった農村工業化の内発性に着目している。そして、つぎのような六要因を提起している (96)。

- (1) 西側諸国の主要都市以上という農村の人口密度
- (2) 農業以外の仕事で、より生産的に雇用されうる労働力の膨大な供給過剰
- (3) 古くからの工芸の伝統など、工業化を促進する歴史的な素地
- (4) 企業家として（リスクをいとわず）、かつ広範な開発上の役割において、機知に富むローカル・レベルのリーダーシップ
- (5) 耕地面積が減少し続けるなか、貧困や不完全雇用から抜け出すための新たな好機を見極める末端レベルの家庭に、広く受け入れられている企業家としての才覚や成功への心得
- (6) 高水準な集団・家計貯蓄、そして生産設備や住宅を含む社会基盤への再投資

このなかで、「企業家としての才覚や成功への心得」に関しては、いわゆる「温州モデル」が事例に取り上げられ、その註には、さらにK・フォスター & 姚先国 (Forster and Yao 1999, "A Comparative Analysis of Economic Reform and Development in Hangzhou and Wenzhou Cities") の次の論考がことに興味を引くと付記されていた (261)。

……杭州や温州の発展についての研究において、Forster and Yao (1999) が指摘するのは、そうした都市が伝統的に利益を重視し、商業活動に敬意を払うと

いった、「主潮をなす儒教的価値観に対抗する文化的伝統である。……南宋の時代、温州に、永嘉学派（Yongjia school）として知られるひとつの学派が現れた。それは、牛耳を執る儒教的価値体系を批判し、富国のために商工業ならびに利益をより重視することを提唱した。……一九世紀末には、「Dong Ou（温州東部）のthree gentlemen」と名高い、温州東部の学者三名が、その基本的な立場を改めて主張した。こうした際立った文化的、思想的伝統は、温州の人々が備える企業家精神の基盤となり、改革の時代に大いに寄与してきた」（67）。

この「three gentlemen」をどのように訳出してよいのか。にわかにはわからなかった。あまりにも簡単な英語表記ゆえに、かえって探しあてられるのか不安にさえ感じた。手がかりは、「温州東部」は「Dong Ou＝東甌」であること。「百度」（中国語のインターネット検索）などに「永嘉学派」「東甌」「三」などを入力して、ウェブ・サイトをたずね歩く。そして、ついに温州経済の文化的遺産に関する考察（中国語）を見出し、「three gentlemen of Dong Ou」は「東甌三傑」であることが明らかになった。

この翻訳では、そのほかにも、「都市整備事業」と闘うとして「みずからの軍服と勳章を身にまとい、まもなく取り壊される自宅の前で一枚の写真を撮るためにポーズをとっていた」

〔26〕人物の名前（漢字表記）から、氣功における坐式の基本的な功法名にいたるまで、さまざまな言葉を手もとの Mae から終日・終夜探し求めた。そして、遅ればせながら身をもって、サイバー空間に途方もなく広がる公共領域を体感。訳者というアイデンティティを強く意識した「わたし」は、まさにそのとき、トランスナショナルな「サイバー都市」の流動者でもあった。

谷村 光浩（たにむら みつひろ）

一九六二年大阪生まれ 博士（工学）（東京大学大学院工学系研究科）名城大学経済学部経済学科・大学院経済学研究科 准教授
 これまで、名古屋大学大学院国際開発研究科助手、チュウロンコン大学建築学部都市・地域計画学科 JICA 専門家、財団法人国際開発高等教育機構（FASID）国際開発研究センター研究員、国際基督教大学二世紀 COE プログラム リサーチ・フェロー、国際連合大学（UNU）学長室客員研究員として、開発途上国の都市や農村の経済・社会開発国際協力論などを専攻。研究のフィールドは、中国 中国系ディアスポラ社会。
 余暇には、愛娘と油絵などを共同制作。第一七回「全日本アートサロン 絵画大賞展」自由表現部門 入選。『わたしのまらのランドマーク』に squared 二〇〇七 油彩 F10。